

新約聖書
(九月—十二月)

9月1日

言^{さから}い^{しるし}逆いの徴（上）
（徴の宗教）（ルカ2）

二・三四

そこでシメオンは彼らを祝福してその母マリヤに言う「見よ、此の子はイスラエルの多くの人の倒れるか起きるかの為に、また言^{さから}い^{しるし}逆いの徴の為に置かれた。」（ルカ二・三四）

新秋第一日と共に我々は新約聖書に入る。マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの四福音書は夫々、言、行、心、靈の特色を有った福音書と見るが、謂はばクワルテット（四重奏曲）の如くである。イエスの降誕（受肉）、受洗云々と進めてゆく。

大ローマ帝国の第一人者たるアウグストの治下に、世界の唯一人者が出現した。寒村ベツレヘムの洞窟小屋の片隅の馬槽の中にどん底の貧しき相^{すがた}で。系譜は「アブラハム：ダビデ」（マタイ・一）ではあつても父ヨセフは名ばかりで、母マリヤは聖靈の力でイエスを孕んだのであつた。マリヤ自身全く驚いたのだが、天使の言によつてこの天的な事態を知り、「ハイ、私は主の婢女です。み言の如く私に成つて下さい」（ルカ一・三八）と答えてイエスの降誕となつた。

聖靈の人シメオンという老人が、第二イザヤの預言の成就の日を待っていた。時期^{カイロス}が満ちてその日が来た。マリヤの腕からイエスを取り抱き、右掲の重大な言を吐いた。即ちこの子が「言^{さから}い^{しるし}逆いの徴」だという預言である。徴とは啓示の暗号であり且つ顕現であるということ。イエスは換言すれば「蹟きの石」（ペテロ前書二・四一参照）であり、「工師^{いこうし}の棄てた隅の首石」（詩一一八・二二）である。それ故、福音の、救贖の大なる徴をイスラエル自身が見そなつて十字架につけた。キリストの目的は、地上王国でも、御利益宗教でも、戒律宗教でもない。それでユダヤ教徒の蹟き、「言^{さから}い^{しるし}逆いの徴」となつた。

9月2日

言^{さから}い逆^{しるし}いの徴 (下)
(ルカ2)

祭司も律法学者も律法厳守のパリサイ派も自由思想的なサドカイ派も禁欲主義的なエッセネ派も民衆もローマの官憲も兵士たちもそしてキリストの弟子すらも皆夫々の角度からキリストに願った。そして歴史の終末まで、キリストの十字架、復活、聖霊に願う人々は所謂キリスト教徒の中にも絶えない。であるから正に「言い逆いの徴」なのである。

キリストの言も行為も謂はば水わりではなく霊酒そのものだからである。次元がちがうからである。例えば「私が地に平和を投ずるために来たと思うな。平和ではない、反って剣を投ずるために来たのだ……」(マタイ一〇・三四……三九参照)の如きは「平和の君」たる彼と矛盾した言である。

私は茲に端的に言っておきましょう。福音書はすごいドラマですから、このドラマの中に投身してキリストに体当りして降参するまではキリストの言行に願うのです。降参してキリスト自身の中に投身してごらん下さい。するとものすごい力が、それは愛の力ですが、全身を貫いて、なるほどこれが聖霊のバプテスマかと気がつく、こんどはキリストの烈しい言もけたちがい行為も力となり、飲びとなって体受できるのです。それでこそ「よろこびのおとづれ」即ち福音たることがあたまではなくからだで感得、体得できるのです。そのときはじめて日蓮の言った身読という読み方ができるのです。聖書について研究するのではなく、聖書の現実の中でキリストを見、キリストを聴き、キリストに捉えられるのです。そのときはじめていかにキリストが「言い逆いの徴」たる人物であり、神の子であるかが頓悟せしめられ、我々自身がキリストの徴となってゆくのです。



母マリヤと幼児イエス（レオナルド）

9月3日

受肉

(ヨハネ1: 1-18)

元始に言靈^{ことだま}があつた、言靈は神と共に在つた。言靈は神であつた。万物はこれによつて成つた。……この中には生命があつた。そしてその生命は人々の光であつた。(ヨハネ一・一、三、四)

言靈^{ことだま}は肉となつて我らの中で幕屋した。我らは彼の栄光を見た。父からの独子の栄光で恩恵^{めぐみ}と真法^{まこと}とに満ちていた。(一・一四)

律法はモーセによつて与えられ、恩恵と真法とはイエス・キリストによつて到来した。未だ神を見た者はない。ただ父のふところの中に没入した独子のみがこれを顕^{あらわ}した(ヨハネ一・一七、一八)

神は永遠の實在である。元始とは創造の元始で、言、即ち言靈^{ことだま}が創造以前からあつた。それは神性であつた。神と共に實在した神格であつた。この言靈には生命があり、且つ光源であつた。万物はこの神格によつて創造された。人間もそうである。しかもこの言靈(ロゴス)が受肉して我ら人間界の中で幕屋を張つた。即ち我々と同次元の肉なる存在となつた。しかもそれは光と生命で輝いていた。神を父と呼ぶ独子であつて、神の恩恵と真法に満ちていた。律法(十言、十戒)はモーセによつて与えられ、恩恵と真法の現実即ち愛と義の現実を受肉のキリスト・イエスによつて到来した。イエスは父の懷に没入した正に父と一如の実存である。その言靈なる実存に生命があつた。その生命の實質は愛である。愛は熱いから光なのである。言靈は生にして愛にして光なのである。この言靈によつて創造された人間には同質の靈が宿る。だから靈止^{いとこ}なのである。創世紀一・二七と照応する。

9月4日

少年イエス
(ルカ2:40-52)

「なぜ^{二・四九}ぼくをおたずねになったのです。ぼくのお父さん〔父なる神様〕のことに^{かかわ}関っていないなければならないことが、あなた方はおわかりではなかったのですか」(ルカ二・四九)

イエスの幼少年時代のことは、十二歳のイエスが過越の祭の際に両親に伴れられてエルセラムへの都のぼりをした時の記事(ルカ二・四一―五二)のほか何も記されていない。

この記事の前後に次の二句がある。「この幼児は次第に生い立って逞しくなり、智慧が満ち、しかも神の慈悲が彼のうえにあった(ルカ二・四〇)という。また「イエス智慧も、年齢も増し加はり、神の前、人々の前に益々慈愛を受けた」(ルカ二・五二)という。

イエスの両親、ヨセフとマリヤはお祭がすむと帰路を急いだ。イエスが同道していないのに一日路を歩いたあとで気がつき、エルサレムに引き返した。やっと三日目に神殿にいるイエスを発見した。そのときの問答でのイエスの応答が右掲の言である。少年イエスにとってはお祭よりも父なる神のことを神殿で祭司や律法学者と問答することの方が大切なことであった。ところが宗教的専門家たちが、神童イエスに問答でかなわない。次元がちがうのである。なぜか、彼は天の父、霊なる神との祈りの世界で深い霊の交りをしていたからである。その後の約二十年間の生活も、シナゴグでの礼拝と旧約聖書(主として律法と預言書と詩篇)の身読、独りで朝まだきや深夜にタボルの山等で深く祈って、父神霊神のみ力にあづかったにちがいない。

9月5日

聖霊のバプテスマ

(マタイ3:11~17)

「^二私は本当に貴方^{あなた}らを水の中でバプテスマして回帰させよう。だが私より後^{あと}に来る方は私に優^{まさ}る力の御仁^{ごじん}で、私はその鞋^{サンダル}をお脱^ぬがせるにも価^あしない。彼は貴方^{あなた}らを聖霊と火の中でバプテスマなさる。

さてイエスはバプテスマを受けて直ちに水の中から上^あると、見よ、天開け、神の霊、鴿の如く舞い降りて彼の上に臨むを見給うた。また見よ、天から声があつて曰く、「これは我が愛する子、これを我は悦ぶ」。(マタイ3:11、16、17)

バプテスマ(洗礼)のヨハネは、ヨルダン下流に現はれて、水のバプテスマで人々の身も心も神への回帰^{ガイイブ}(「悔い改め」という訳語は消極的)を促^{うなが}す先駆的役割を神に命ぜられていた。しかし彼よりあとに立ち現はれるイエスは火の如き聖霊のバプテスマをなさる方である。水の洗礼を要せぬイエスは、我々罪びとの次元に自らを置いてヨハネから敢て受洗した。全身の祈入を以て神の中に回帰、帰入したイエスは水の中から立ちあがると直ちに聖霊が天降りした。その靈光の相^{すがた}が鴿の如くであった。聖霊は彼の中に入ったのである。すると天来のみ声が響いて来た、「これわが子よ、われに愛せらるる者、この者の中に我は悦び入ったのである」と(直訳)。洗礼のヨハネが預言しているように、この全的な聖霊の人イエス。我々も天界のキリストから聖霊のバプテスマに与^あかってこそ始めて真正のキリスト者となるのである。

9月6日

キリスト対サタン
(マタイ4:1-11)

「^{四・四}人の生きるのはパンのみに由るのではない、神の口から発するすべての言葉に由る。」

「^七汝は汝の主たる神を試みてはならない。」(申六・一六マタイ四・四、七、一〇)

「サタンよ退け!『汝の主たる神を拜して、彼にのみ仕えよ』」(申六・一三)と録されてある

聖霊の人イエスは伝道に乗り出す前にサタンとの一騎打ちをしてこれにうち勝つを要した彼はまづ荒野で四十日四十夜断食して飢え給うた。狡智なサタンはイエスに「もしあなたが神の子だというなら、これらの石がパンに成るように命じなさいよ」と言った。これに対してイエスは右掲第四節の言(申八・三)で応じた。人間は霊肉不可離の存在であるが、魂の問題は普通棚あげになっている。しかしイエスは神の言をパンより重視した。神の言は霊的な生命力を与えるからである。このことは聖霊を受けるとよく解る。肉体が空気を必要とする以上に人間の魂は神の霊気をもった霊言を要する。経済問題で負けたサタンは次に宗教問題をもちかけた。即ちイエスを霊にて神殿の頂上に伴れて来て、神の子ならそこから跳び降りても天使が助けてくれるからやったら好い、と唆した。イエスはこれに対して第七節の言で応えた。奇蹟や御利益を求めて神意を求めない宗教を拒否した。次にサタンは政治問題をもちかけて、現世に勢力を擅^{はたら}にしているサタンに拝跪すれば全世界をやると言った。これに対してイエスは第十節の「サタンよ退け……」で応じた。我々にとって神に仕えるか、サタンに拝跪するかで、天国ゆきとなるか地獄ゆきとなるかである。

9月7日

天国回帰(上)

(マタイ4:17-5:3)

四・一七 「汝ら回帰せよ!」 天国が近づいたから。(マタイ四・一七)(三・二参照)

五・三 「恵福なるぞ、^{なまし}霊の貧しき者らよ、天国はその者らの有^{もの}だから」
(五・三)

「汝ら回帰せよ! 天国が近づいたから」は洗礼のヨハネの第一声であった。全存在の転向、回帰の宣言である。そして「蝮^{まむし}の裔^{すえ}よ」とまで叫んで時のユダヤ人の在り方を糾弾した。

この同じ言がイエスの伝道の第一声であった。ヨハネはイエスを指したが、イエスの自らの告白であった。即ち、天国とは神意支配の場であると共に神意体现者たるイエス自らのことだ。近づいた、とは此処に来てある、ということだ。何処へ回帰するのか、イエスの許^{もと}へなのである。私に來よ、私が天国だ! という告白である。

イエスはガリラヤ湖の北側の高原で所謂「山上の垂訓」を語った(マタイ五・七章)。驚くべき内容、キリストの全福音がこの中にある。これは「山上の大告白」と申したい。

その第一言が福音の天的な鍵である。イエス自身霊が貧しかった。自分を何ものともしなかった。イエス自身は神の前に空^{から}っぽで、幼稚園の童児同然であった。私はそれで、イエスを無(私)者と申し上げている。正に神童であり給う。だから神が完全に占領した。無即無限無量者となった。だから「我を見た者は父(なる神)を見たのだと言った(ヨハネ一四・九)。「我と父とは一つなり」(ヨハネ一〇・三〇)と告白した。これが「霊の貧しき者」の真相である。イエスという神童が即ち天国体なのである。では我々はどうしたらいいのか。

9月8日

天国回帰（下）

（マタイ5：3-12）

五・三 「恵福なるぞ、^{たましい}霊の貧しき者らよ、天国はその者らの有^もだから」
 「恵福なるぞ、義のために迫害された者らよ、天国はその者らの有^もだから」（マタイ五・三、一〇）

山上の大告白の劈頭の「恵^{マカリ}福なるぞ」はむしろ「恵^{オイ}まれたるぞ」なのである。天的な幸福である。我々はイエスの如く神の前に無私無我で在り得ない。自我、我執、利己である。これを罪という。だから万人は罪びとで、その意味で義人はイエスを描いて他に皆無である。この我執を贖って無罪、無私の根源現実を賜ったのがキリストの十字架の贖罪である。私はこのキリストの第一言を祈りを以て冥想していたら、こうひびいて来た。「恵まれたる哉、汝、わが十字架によって霊の貧しさ即ち無私なる根源現実を賜った者よ、天国即ち聖霊の我れ汝の中に在り」と。かくて十字架の主の中に私は祈入し、回帰し、帰入した。キリストの聖霊が私の中に入って下さった。私は畳の上に平伏した。全身が熱くなった。「聖霊と火のバプテスマ」とはこのことであつた。十字架と聖霊は不可分の絶対恩恵となつた。一九五〇年晩秋、大阿蘇の垂玉温泉瀧見荘に於ける祈りの場での聖霊降臨の体験とその後の自宅での単独の沈黙の祈りに於てのこの体験が決定的なものとなつた。私は使徒たちの信仰の次元に入れられた。それから使徒行伝的な霊的体験をさせられた。ところがこの天与の「義のために」あるグループから疎外された。やむを得ない。私は孤軍となつた。しかし預言者と使徒が私に味方となつた。私は死に至るまで罪びとに過ぎないが、この恵福を如何にせん！ 聖霊を身証せずんばあらずである。

9月8日

八恵福

作詞：1987.9.1

歌調：「美しき天然」田中穂積作曲

(起句「空に囀る鳥の声」)

- | | | | |
|---|--|--|---|
| <p>4
恵福なるぞ 夏の日の
向日葵草の すがたにて
天つ義の陽に 飢え渴く
そのたましひは 飽くを得ん</p> | <p>3
恵福なるぞ 柔和なる
影は河原の 撫子よ
斯かる人こそ 地を嗣がめ
この世の末の 聖国にて</p> | <p>2
恵福なるぞ 佗しらに
野に咲く桔梗 昨日今日
悲しむ人よ キリストは
なぐさめ給ふ 涙して</p> | <p>1
恵福なるぞ 汝が靈は
わが十字架に あがなはれ
無の貧しさに 澄む董
汝のものよ 天国は</p> |
| <p>8
恵福なるぞ 義のために
責められし人 天国は
その人の有 桜花
散りゆく相 美はしや</p> | <p>7
恵福なるぞ 平安の
床しきすがた コスモスよ
平和を醸す その人は
げに神の子と 称へらる</p> | <p>6
恵福なるぞ 谷川の
白百合の如 清らけき
心の人は 隠れたる
神を見るなり 現世に</p> | <p>5
恵福なるぞ 紅の
薔薇の如く 芳はしく
人を憐れむ 愛の人
主のあはれみに 愛せらる</p> |

9月9日

律法と福音

(マタイ 4:13-5:42)

五・三二

昔、人々に「殺すなかれ、殺人者は審判を免がれない」と言はれていたのを汝らは聞いている。けれども汝らに告げる、凡そ兄弟に對して怒る者は審判を受ける。また兄弟に馬鹿者呼ばはりする者は衆議に、また痴者よという者はゲヘナの火にあう。(マタイ五・二二、二三)

モーセの十戒(十言)は神との関係が前半の四言、人との関係が後半の六言であることは既に見たわけだが、対人関係で最悪の罪は殺人である。これは刑法に触れる犯罪である。これが国際関係の破局たる戦争となると罪でなく功績となると何たることか。

一般の怒りは憎しみの心に発する。憎しみ、妬み、争い、等がエスカレートして殺人となる。女性に対する色情もイエスは既に姦淫だと言ひ給う(五・二七、二八)。モーセの十戒の根本精神はかつて述べたからここには触れないが、一般の伝統的なり方としては要するに外的行為面に関はっているが、イエスの「山上の垂訓」は人間の内心面、内心の相を見ての論しである。そうなると誰もキリストの言を満たし得る者はない。福音の言それ自体が審判のようにひびく。假令モーセに及第してもキリストには落第する。ダンテの「地獄」ゆきとなる。

それでは何が福音か。イエスはところが汝は落第生だから、私に降参したから天国に入れてやるよ、と言ひ給う。天国体たる私の中にあるがままで入って来なさいと。キリストの中に入ると、光も生命も愛も義も力も我々の中に入ってくる。するとキリストの言が逆に力となる。だから福音なのである。

9月10日

敵をも愛する

(マタイ 5 : 44-45上)

(ルカ 6 : 27-30)

五・四四

されど我汝らに告ぐ、汝らの敵を愛し、汝らを責むる者のために
祈れ。^{四五}これ天に在ます汝らの父の子とならんためなり。(マタイ五・四四、四

五上)

キリストは我々に不可能のことをずばりとおっしゃる。しかもこの場合、の場合とかいう状況判断や条件つきなどではない、無条件に断言的に言いなさる。とにかく福音は全的な全身的な靈肉渾然たる世界である。イエス自身には父なる神あつて他に何も無いといった境地、彼自身が父なる神の中に投身しておられるからである。

だからキリストの言を外から聞いていたのではダメ。キリストの言をキリストの中で「エン・クリスト」で聴くところに福音を受けとる場がある。キリストはどん底の愛で敵をゆるし且つ荷う。その極限は十字架から「彼らをゆるしてやって下さい」と父なる神に祈り給うたあの愛である。その敵の一人が罪びとなる私である。そのように、キリストに文字通り生命がけの愛でゆるされ、愛されている。そのキリストの中に投身すると敵を荷うゆるしの愛が、キリストの聖靈の愛が、わがうちに火となつて燃える。「我に來よ、我が中に入れよ、さらば汝をして敵を愛せしめる」とのみ声である。不当に責められ、白眼視され、除け者にされ、迫害されようと、却て相手が気の毒になり、祈りを以て逆に荷うことになる。キリストと共に、キリストの中で、エン・クリストで、在天の父なる神の子とされるのである。不可能が可能になるから、そこにはもう敵は無い。眞の天下無敵とはこのことである。ただキリストの聖名を讃えるのみである。合掌。

9月11日

最高の言

(マタイ 5 : 45—48)

(ルカ 6 : 32—36)

五・四五下

天の父は、その太陽を悪者の上にも善人の上にも昇らせ、雨を義しき者にも義しからぬ者にも降らせ給う。さらば汝らの天の父の全きが如く汝らも全かれ。(マタイ五・四五下、四八)

キリストの発した言の、そしてこの山上の大告白の中での最高の言である。地球そのものの存在も地球のあらゆるものも太陽に絶対依存している。太陽の恵みも雨の恵みも万人に平等、一視同仁である。神の恵みはそうである。だから汝らもそのような全さを有て、とキリストは絶対命令であるかの如く語った。誰にそんなことができるか。それなのにキリストはなぜ、こんな至上命令のようなことを言い給うのか。

ルカ福音書では「汝らの父の慈悲なる如く汝らも慈悲なれ」(ルカ五・三六)とある。「愛は律法の完全なり」(ローマ三・一〇)とあるように、父の完全な内実は愛であるから、同義語である。要するに鴻大無辺な愛の人たれということである。

これもイエスが父と一如である如く、我々も贖主に信入し、帰入して、キリストと一如になるとそのような大きな愛の泉が、湧き、光が流れる。そうするととても楽になり力が来る。十字架で自我がすつとばされ、キリストの無者に根源現実でなっているから、相対的人間Kはどうであれ、愛の力に圧倒されて、「父の全き」「慈悲心」が質的に来る。その相(すがた)は三日月であつても満月の影を抱いている三日月である。ありがたき或!



(マタイ5：45-48) 啓示と体験による告白の伝導をなし給うキリスト（レンブラント）

9月12日

いのり

(マタイ6:5-8)

六・六
 汝は祈るとき、おのが部屋に入り、戸を閉ぢて、隠れて在ます汝の父に祈れ。(マタイ六・六)

キリストのこの言の前後は「汝ら」と複数であるが、この句は特に単数になっている。これは祈りというものの本質は神・キリストへの一対一の関係であるからである。たとひ複数であっても信仰の問題は本質的に単数、現在、一人称、二人称の関係である。上からは「我・汝」であり、下からは「あなた・私」である。

イエスが父なる神に祈り給うたとき、それは「父よ・私」であつた。私は贖主キリストに対して「主よ・私」である。私はあまり「父よ」とは祈らない。「主よ」というときその背後の「父なる神」にキリストを通して無言で呼び奉っているわけである。祈りの中で聖霊が自由に執り成し且つ能いて下さる。「部屋に入り戸を閉ぢて隠れて在ます汝の父に」というみ言はいのりの神秘の世界で主の御本願を寂聴する態勢である。祈りに形式は要らない。野辺、海辺、山間、林間、電車の中、礼拝堂、いづこであらうと自由にこの境地に入れる。夜更けや朝まだきは静かで独り祈るには適している。沈黙の祈り、深い祈りである。「我は門なり」というキリストの十字架の門を平伏して通つてキリストの中に入る。そこは詩篇第二十三篇のような憩の水辺、縁の野辺といつて可い。聖霊の風が魂を甦らせて下さる。聖言が慰め、励まして下さる。時には聖書を黙読することが直ちに力づけられる祈りとなる。「わが言は霊なり生命なり」(ヨハネ六・六三)であるからである。祈りによつてキリストと一如の現実に入れられる。

9月13日

主の祈り（其一）

（マタイ6：7-15）

天に在^います私たちのお父様！ あなたの^み名が聖として崇^{あが}められますように。

あなたの^み国が来ますように。あなたの^み意が成^{こころ}し遂げられますように。天に於^おてのように地に於^おても。

私たちの日用の糧を、今日も私たちに^お与え下^{くだ}さい。

私たちの負債^{かいい}を私たちに^お赦^{ゆる}し下^{くだ}さい、私たちに負債ある者たちを私たちが^{ゆる}しましたように。

私たちを^{こころ}惑^{まど}えにつり込まないで下^{くだ}さい。私たちを^{ゆる}しき者から救

い出して下^{くだ}さい。

（マタイ六・九—一三）

み国と能力^{ちから}と栄光^{さかえ}とは永遠にあなただけのものでありますから。アーメン。

内容を簡単にいうと、

第一 在天の父神靈神への呼びかけ。

第二 聖名の讃仰。

第三 聖国の来臨を祈る。

第四 聖意の天成地現を祈る。

第五 今日一生の祈り。

第六 キリストに赦された土台での祈り。

第七 サタンの試みからの救の祈り。

（附） 神・キリストに一切を帰する祈り。

9月14日

主の祈り（其二）

マタイ 6：7-15

六〇。あなたのみ国が来ますように。あなたのみ意が成し遂げられますように、天に於てのように、地に於ても。（マタイ六・一〇）

主イエスは十字架にかけられる時の迫りを知ったとき、「目をあげ、天を仰いで」父よ！と叫んだ。彼が「父よ！」と祈ると、彼は直ちに父のふところの中である。父と一つである。我らにとって神の聖名は聖である。預言者イザヤが特にその第六章で示したように。聖なる神と我々はいかにして関わりが有てるのか。キリストの十字架の贖罪によってである。だから罪びとが畏れを以て親しく聖名を呼ぶのである（コリ前一・三〇参照）。それゆえ、第一、第二の祈りが我らにゆるされている。

第三、第四の祈りにこれから入る。歴史の終末に神の国が来臨することを祈る。それは天からの啓示的希望だ。福音はそういう終末的な迫りに於て伝道されたものである。ところでこの聖国来臨が本当に祈れるためには、実は聖国がわが衷に來ていなければならぬ。それはどういうことか。マタイ五・三で既に見たように、十字架の贖罪により十字架の門をくぐって聖国の中に入れられ、聖霊がわが中に入って下さっている現実である。これが聖国の内在である。わが胸の中に否全身に聖霊の氣が充満しているから我々は天国体とされている。だから終末的な聖国の来臨を確かなる希望として祈れるのである。天上、即ち靈界では聖意は成っている。その如く地上でも現成して下さいとの祈りは、提身してでなければならぬ。即ちどうぞこの僕婢の中で、を通して、成って下さい。どうぞお用い下さい、との祈りである。聖意体现の祈りである。

9月15日

主の祈り（其三）

（マタイ6：7-15）

六・二二 私たちの負債おいめを私たちにお赦し下さい、

私たちに負債ある者たちを

私たちが赦しましたように。（マタイ六・一二）

マタイ六・九、一〇即ち「主の祈り」の第一、第二は神・キリストと我らの関係の祈りであるが、六・一一―一三は我ら自身に関はる祈りである。六・一一は「来る日毎の」生活問題の祈りである。「今日も」パンを下さい、という祈りである。それは勿論、はたらかなければならない。しかし子供たちは必ずしも「バイト」ができない。要するに「善く学び善く遊び」「父母を尊敬し」善く仕えれば、パンはいただける。今日一日を全力投球的に生きるとは、六・三四「一日の苦勞は一日にて足れり」の精神。

六・一二の「負債おいめ」は金銭上のこともあろうが、他人に対する罪過（広い意味）である。「私たちが赦しましたように」という事実の裏づけを以てするか、決意を表はすか（ルカ一・三）、要するに他人を赦すことなくしては祈りは聴かれぬ。隣人（広義）を恨んだり妬んだりしている心を以てしては祈りの聴かれようはずがない。「七度を七十倍するほどに」（マタイ一八・二三）ゆるす心を以てである。他人を赦すことは、我々がキリストに十字架で根底からゆるされていることの感謝の自覚に於て可能である。赦すばかりでない、相手のために執り成しの祈りができるのである。

社会及び世界の平和は実はこの祈りの実践に於てこそ成りゆくのであって、お互いにゆるす大きな心のないところ、要するに利己的、主我的な心が禍いで、慾心が戦争の原因だとヤコブ書にある通りである（ヤコブ四・一）。

9月16日

主の祈り（其四）

（マタイ 6：7-15）

六・二三 われらを試惑こころみにつり込まないで下さい。

われらを悪しき者（悪）から救い出して下さい。（マタイ六・二三）

試惑は広い意味でサタン的なものである。それも神の光の中であることを忘れてはならない。人間は弱いから、ということは我々の中に慾心があるから、それに良心が負けることが多いから、試惑の環境に立ち入らぬように、という祈りである。マタイ四・三に「試むる者」とあるはサタンのことで、この試惑とは同根の言である。原語の「悪しき者」も同じくサタンで、原語が「悪」なら中性だが、ここは第二格であるので、どちらにもとれるが、両義的にとっても可いが、具体的な悪の力あるものはサタンだから、サタンと見るのが現実的である。サタンとの一騎打にキリストは勝ち給うたが、我々は勝てない。だから、この祈りと共に、キリストの中に投身するに限る。「神はわれらの避け所また力なり、なやめるときのと近き助けなり」というあの有名な詩篇四六・一である。キリストの中に逃げ込むとそこに力がくる。その力で主が勝って下さる。これがサタンとの戦に勝つ道である。ルターは詩篇第四六を基にしてあの有名な讚美歌を作った。「神はわが櫓」（自由和訳二六七番）を歌って下さい。

終りに一つ附言したいのはシェヴァイツァーの「つきたりの祈」である。幼児のとき彼は「主の祈り」のあとで「愛する神さま、氣息いきをして生きているものをみんな獲って恵んでやって下さい。すべての禍害わざはひから防ぎ、やすらかに眠らせてやって下さい」と祈った、ということが彼の「わが幼少年時代」という原書の中に書いてあった。彼はこの祈りの通り、在世中、一匹の虫も殺さない生き方をした。

9月16日

聖書は神のドラマ

(マタイ7:7に因みて)

作詞: 1980.10.28

歌詞: S. 370 「めざめよわが霊」

1

聖書の扉に 体あたりし
平伏し仰げば 門はひらき
われらは入りたり 神の国に
みどりの牧場に 泉辺にぞ

2

聖書の現実^{うつつ}は 神のドラマ
われらの集会^{くわい}は その中にて
棄身の心で 祈り叫び
み言を喰い み霊を飲む

3

祈りの場^ばにて み霊臨み
恵みとたまもの 豊かなれば
或る人は異言 或るは靈歌
病もいやされ み名を讃う

4

十字架されば み霊臨み
み言息吹くよ あなうれしや
我らはいのちに 満ち溢れて
み名を讃えつつ 主にぞ生くる

9月17日

人を^{さば}審かぬこと
(マタイ7:6)

セー
 汝^{セー}ら人を^{さば}審くな。審かれざらんためなり。
 (マタイ七・一)

生来人間は自己義認、自己弁護をする傾向をもっている。他人の欠点を言^{こと}あげず。他人を見くんだり、けちをつけたりする。そういう根性をパリサイ根性という。キリストが不可とされた心のあり方である。自分の目に梁木^{うづばり}のあるのを棚にあげて他人の眼の塵を見て何のかのと審く。これをキリストは偽善者と言った。自分の欠点を自認して、心を低くして、更に無心となると、他人の眼の塵を同情してそれをとりのぞくことができる。キリストは論し給う。神の「最後の審判」を畏れん哉。

こういう審きとはちがって、真理に即せんとして、社会悪や政治の非を批判するのは、義の戦であるから聖霊の權威を以て為すべきである。それは十字架道である。

フランスの世界的文豪ユーゴーはナポレオン三世の政治を批判したので、国外に追放された。彼はペンを執った。フランスで出版できないのでベルギーのブラッセルの出版会社に交渉した。その本をよんで、「これは生きた聖書です。これを読んで泣かない人はいないでしょう」といった由。その本はやがて出版された。その出版会社社長にユーゴーは手紙を書いた、世界未曾有の短かい手紙を。即ち「?……」としか書いてない。出版主はこれに対して「!……」と返信した。正に言以上の言である。これが何を意味するか読者は御自由に判断していただろう。ユーゴーは筆で政治批判をした、小説の形で。それは最早単なる政治批判ではない。人間社会が神の前に如何の問題である。その小説は歴史の終りに至るまでの不朽の名作、超批判、深い愛の名作『レ・ミゼラブル』(「噫無情」)であった。

9月18日

求めよ、然らば与へられる

(マタイ7:7-11)

求めよ、然らば与へられる。探ねよ、さらば見出だす。門を叩け、さらば開かれる。(マタイ七・七)

キリストの言は断言的、無条件である。聖霊の権威と愛に因っているからである。だから、求める方も全的な全身を以てする体当りの求めでなければならぬ。第八節で畳みかけてキリストは断定しておられる。一体何を求めれば好いのか。何でも好いらしい。ただ私心慾心の求めではダメである。生命がけの求めでなければならぬ。何でもいのちがけなら得られる。しかも求めの究極のものはキリスト自身である。キリストを祈り求めるのである。するとキリストは自分自身を全的に与え給う。これほど確かなことはない。キリストを得ることはキリストの有となることである。そうすると我々の側の個々の求めの内容は神・キリスト中心となって私心なき求めとなり祝福される。

だから何はさて置きキリストを祈り求めることだ。キリストに祈入する、帰入するのである。それは全身をキリストの中に投身することなのである。キリストを探ねればキリストは其処に身近かに居られる。燈台下暗しであるから燈台の中に入ればよく見える、難破しそうな船も。そして助け舟と自分がされる。キリストという十字架の門に体当りするのが「叩け」である。必ず開かれる。自分は門の下にぶっ倒れる。キリストが起して下さる。聖霊の力を与えて下さる。「在天の父は求むる者に善きものを賜はらざらむや(七・一一)とある。「善きもの」とは「聖霊」のことである(ルカ一・二三)。聖霊は何ものにも替えられない。

9月19日

黄金律

(マタイ7:12)

それゆえ人々が汝らになさんことをおよそ願うかぎりのことを、その如く人々にせよ。これこそが律法であり預言者である。

(マタイ七・一二)

この句を黄金律といっているわけである。「律法と預言者」という表現は、我々キリスト者にとっては旧約聖書ということになる。ユダヤ教徒は旧約とは言はない。彼らの聖書は「^{トイ・ネビーム・ツ・クズミム}律法、預言者諸書」という長い名称である。要するに旧約の根本精神を一言で称うならこうだとキリストが告白なさった。人にしてもらいたいこととは何か。具体的にはいろいろある。それを煮詰めれば愛せられたいことである。愛せられたいように愛せよ、ということになる。ひとばかりではない、動物をも植物をもそのように愛すると、動物も植物もよろこぶ。

だからキリストは全心全霊全力を以て神を愛せよ、また隣人を愛せよ、これは同じ愛の両面である。仏教も慈悲に尽きるし、孔孟の教も仁に尽きることをおもえば、要する愛すること、人助けをすること、人を救いあげることが天道であり人道であるということに帰する。挺身の、棄身の愛の行為に優るものはない。その極致がキリストの十字架の贖罪愛であった。マキシミアン・コルベ神父がナチスのユダヤ人大殺害の Ауシュヴィッツ 強制収容所で一死刑囚の生命の身代りをした愛を想う。

ヨハネ伝の「元始に言霊があった」と実は「元始に愛(の行為)があった」と告白したいくらいである。愛こそは神のそして神から来る力のアルパでありオメガである。黄金律はこの霊愛道に極まる。

9月20日

狭き門

(マタイ 7:13, 14)

七・一三
狭き門より入れ、滅びに到る門は大きく、その道は広く、これより入る者多し。生命に到る門は狭く、その路は細く、これを見出す者少なし。(マタイ七・一三、一四)

「狭き門」というと、我々日本人はすぐ入学試験の関門を連想する。入試の狭き門はどれほど日本の青少年少女の精神的肉体的マイナスになっているか、由々しき問題である。青少年がその天性天資の資質才能に即した勉強ができるように大門大道への学制の大改革を要する。文部省は政治に左右されず、独立的存在として世界的視野を以て道を拓くべし。

神・キリストの門は狭い。それは各人が裸一貫で何も持たずに体当りする門である。十字架という門だ。この関門に体当りしてぶっ倒れて「透得」と、自我、我執が贖はれているので「乾坤独歩」することができ。天の「大道は無門」である。聖霊の風の吹く道であるから。「無門関」という禪宗の句も、キリストの十字架と聖霊を体験すると案にうなづけるのである。地路は各人の足で歩く路である。一人一人がのびきならぬ路を歩かせられる。それが運命環境の特殊性であり、人生なのである。「千差路あり」とはこのことである。その路を歩くに当って神・キリストを路案内とすると行きづまりを知らない。人生風雨あり、荊棘あり、岩石あり、しかしまた真清水あらばキリストを飲み、葡萄の房あらばキリストを喰へ(ヨハネ六・五五―五八)。キリストを飲みキリストを喰い、キリストを道案内として歩く細路が生命の路で、そういう地路は即ち天道なのである。

9月21日

聖意體現

(マタイ 7:15-28)

七・二二 私に對して、主よ主よという者ことごとくは天国に入らない。そ

うではなく、天に在ますわが父の御意みこころを行なう者は天国に入る。(マタイ

七・二二)

キリストはこの言の前に、羊の扮装をして内心は豺狼である偽預言者に注意せよ、と警告している。宗教界にはそういう靈的高慢の白いサタンが時折出現する。それがまた似而非なるカリスマ的なはたらきすらやるのでキリストはこの言のあとでそのことに触れておられる(七・二二—二三)。

最も大切なことは神意を体してそれを體現することである。神意を体するためにはキリストの十字架を冥想し、無私の心境に於て神・キリストの本願を承り、全身をキリストの中に投身することである。信仰とはそのような全身的な行為であるから、信仰を私は信仰と謂う。そうすると聖靈の力が臨むから、外的な行為がおのづから発動するわけである。それを體現という。信仰と行為という二段構えではダメである。信仰としてキリストと一如にされるから、それがまた即體現として現はれる。人間はダメだから、それが自然法則の如くはいかぬことも勿論ある。しかし、この靈的必然の中を生きていることが大切で、いかに體現の面がみじめであっても、それは作られた立派さよりも神の眼には美しいにちがいない。「御意を行なう」ということで、天的な靈然の相である。キリストの行為に福音書でぶつかると、キリストは正に神然の世界である。キリストは聖意を行なずる人を啓上の家に譬えている(七・二四、二五)。

以上を以て「山上の大告白」を終るが、聖靈の「權威ある」力ある愛の聖言であった。

9月22日

百卒長の信仰

(マタイ 8:5-13)

(ルカ 7:1-10)

「^{ハ・ハ}ただ一言だけ言って下さい。そうすれば私の僕は癒^{いや}されます。」
 「まことに汝らに告ぐ、このような信仰を我はイスラエルの中に一人として見出だしことがない。」(マタイ 8:8、10)

ガリラヤ湖の北岸のカペナウムはキリストの伝道の根拠地であったが、ローマ軍の百卒長が、イエスに自分の僕が中風を病んで苦しんでいることを申し上げた。では行ってやると答えたが、百卒長は、とんでもない。自分は自分の屋根の下に先生をお迎えするに価しない者です。ただ一言賜はれば癒えます、と率直に答えた。そしてその僕は自分の命令によく聴き従う旨を告げた。これを聞いて、イエスは驚きあやしんで言った「こんな信仰者はイスラエルの中に一人も居ない。異邦人たちが東西からやって来てアブラハム、イサク、ヤコブと共に天国の宴につくとき、選民は外に逐い出されて切歯哀哭するだろう」と。そして百卒長に「往け、汝の信ずる如く汝に成れ！」と叫んだ。とその時直ちに百卒長の僕は癒やされた。

私も陸軍関係の諸校でドイツ語を教えていた時期があったが、軍人が命令に絶対服従で上官が部下を愛する限り、それは美しい信頼関係であるのを見た。この百卒長と僕の関係も正にそうである。キリストを全的に信じている百卒長はキリストの一言に力あるを信じていた。だからキリストが「汝の信ずる如く成れ」の力ある靈言を発するや、時間、空間を越えて直ちに癒された。聖書は永遠の現在の書である。聖言を本願として全身に信受すると、その瞬間に聖力が来て、身心はみ霊の力と愛と光と生命の現実に入る。

9月23日

人の子は枕する処なし

(マタイ 8 : 10-27)

(ルカ 9 : 57-60 ; 8 : 22-25)

(マルコ 4 : 35-41)

「^{ハニ}狐は穴あり、空の鳥は^{ねくら}罅あり、然れど、人の子は枕する処なし」
^{三四}視よ、海に大いなる暴風雨起こりて、その舟波のために蔽するばかりなるに、イエスは眠り居給ふ。(マタイ 八・二〇、二四)

「狐には穴がある、空の鳥には樹の中に罅がある。ところが、人の子、私には枕するところが無い」とイエスは言った。彼には一定の宿るところがない。無宿者である。石枕、草枕、或はイエスを迎えるどんな人のところにも一夜を明かす。この場合は弟子たちと舟に乗っておられた。ところがガリラヤ湖上を暴風が吹きまくってきた。舟は波をかぶるばかりになった。それでもイエスは眠っていた。鱸の方に茵を枕として(マルコ四・三八)。弟子どもは舟が沈むと言って恐がってイエスを呼び起こした。イエスは風と波に「黙せ、鎮まれ」(マルコ四・三九)と叫んだ。すると大いなる風となつた。そして弟子たちに「なぜそんなに恐がるのか、信仰なきは何ごとか」(マルコ四・四〇)と言つた。枕するところなき「人の子」キリストは到るところを枕とする人であつた。いつ、いかなる処でもそこを神のふところとして眠ることのできる平安の魂であつた。彼の信仰の現実は、我々がどこに居ても空気の中であるように、いづこでも神のふところの中、み腕の中であつた。我々がいつどこであらうと我れキリストの中、キリストわが内という現実が身について来たら、えらいことになる。それを身を以て証したのは、実に使徒パウロであり、且つペテロ、ヤコブ、ヨハネであつた。信仰とは正に信交という現実となつてこそ本ものである。祈りの魂でみ霊の内住が身につくことを要する。

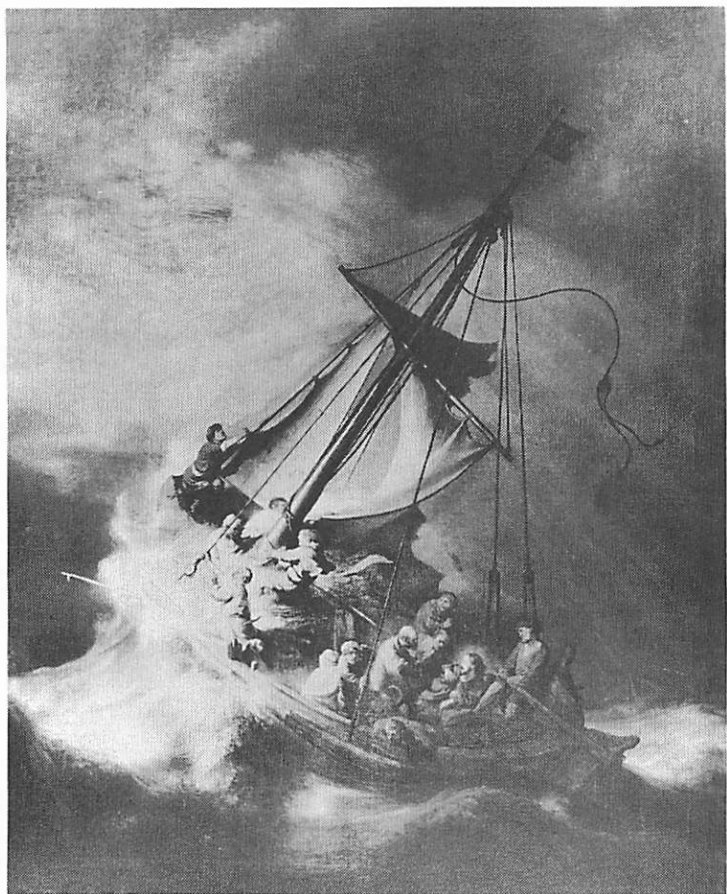
9月23日

(詩) 「人の子は枕する処なし」

作詞：1980・1・15

歌調：S. 39「日くれて四方はくらく」

-
- | | | | |
|---|---|---|--|
| 4 | 3 | 2 | 1 |
| あらしをいたくおそれ
弟子どもは主を起こす
起きざまに主は言へり
「何ぞおそれまじふや」 | 小舟は木の葉の如 ^{ごと}
波風にゆらぐとも
舟板を枕とし
キリストは眠りけり | 山ゆかば石枕
野べにては草枕
主はかくぞ眠りける
父のふところとして | きつねに穴 ^{あな} ぐらあり
小鳥には罅 ^{ひま} あり
人の子枕するに
宿るべきところなし |
-
- | | |
|--|---|
| 6 | 5 |
| 憂 ^{うれ} ひに沈むときも
病 ^{やま} 気になやむときも
キリストのふところに
眠りてみ力を得ん! | 舳 ^{へさき} に主は起ちてぞ
叫びける「風 ^{ふう} 黙 ^{もく} せ!」
あらしは屈 ^な ぎとなれり
ああみ霊のキリストよ! |



(マタイ8：18—27)「その船波のためにはるばかりなるに、イエスは眠り居り給ふ」
(レンブラント)

9月24日

我は罪びとを招かんとて来れり

(マタイ 9 : 9-13)

(マルコ 2 : 13-17)

(ルカ 5 : 27-32)

汝ら往きて学べ「われ憐れみを好みて犠牲を好まず」とは如何なる意ぞ。我は義しき者を招かんとにあらで、罪びとを招かんとて来れり。
(マタイ 9・一三)

カペナウムの収税所のマタイを見て、イエスは「我に従へ」と言ったら彼は直ちに從つてイエスの弟子の一人になった。彼の家で多くの収税人や律法を遵らない人たち（罪びと）がイエスと弟子たちを招いて食事をした。この常ならぬ光景を見て律法実践を誇っているパリサイ人たちが弟子たちに「なぜ君たちの先生は収税人や罪びとらと食を共にするのか」と詰った。イエスはこれを聞いて、「健康者は医者が必要でない。ただ病人には医者が要る。お前たち（シナゴグにでも）往つて学んだら好い。『我憐れみを好んで犠牲を好まず』とはどういうことか」と。これはホセヤ書六・六にある名句で、所謂宗教行事として、犠牲の羔を捧げるよりも、実生活で人を憐んで助けるのが本当の宗教的行爲なのだ。と暗に責め給うた。キリストは高慢なパリサイ人には用がない。彼らは本当は生命をもたない。律法が遵れないといっている「罪びと」をこそ救いに來たのだ、と。言や行爲を繕っている所謂宗教家には偽善の雲がかかっている。その時その場をあるがまま正直に生きて貰いたり滑ったり転んだりしている人の方が本当の人間だ。そういう罪びとは愛すべしでキリストはそういういつわりなき人々の友となりこれを救い給う。収税人であれ、遊女であれ、或はどんな犯罪者であれ、神の前に平伏す魂は救われる。

9月25日

天劍の十字架道

(マタイ10:34-39)

(ルカ12:51-53)

一〇・三四
われ地に平和を注がんと来たとは思ふな、平和ではない、反
つて劍を投ぜんために来た。自分の十字架をとって我に従わぬ者は、
我に相応しくない。自分の生魂を獲る者はこれを失い、わがために
自分の生魂を失う者はこれを獲る。(マタイ一〇・三四、三八)

キリストは一〇・三四のあとで、自分が来たのは、子を父から、娘を母から、嫁を姑から分裂させるためだとか、仇は家の中にいるとか(マタイ一〇・三五-三七)、自分より父母妻子、兄弟姉妹を愛する者、更にはおのれ自身の生魂まで憎むのでなければわが弟子となることは出来ない、などと言っている(ルカ一四・二六、二七)。それはどういうことか。イエスは父なる神のみを相手として生きた。父母も兄弟姉妹も眼中になかった、ということとは父神靈神と一如になったら、神の力、光、生命、愛、智慧が彼に満ち溢れ、それで棄てられた人々が神からの愛で包まれ、貫かれ、担われた。その愛をどう受けるか、それはさまざまであった。やむを得ない。受けない人は自らを審いているまでである。イエスは御自分の実存を告白しているまでのこと。福音は天劍、天下の宝刀だから劍を投ずるために来た、と喝破した。いつわりの平和ではない。神との一対一の絶対関係、我々にとってはキリストとの一対一の絶対関係が立つために絶対関係を問題とするな、ということ。そうすると逆に棄てた人々を皆救うことになる。誤解、迫害に遭うこの道が十字架道である。キリストのため、キリストに在って棄身になると生魂のみならず本當の生命がくる。また人々を本當の生命の中に入れることになる。だから福音である。

9月26日

一粒の芥種からしだね
(マタイ13)

一三・三一
天国からしだねは一粒の芥種の如し、人これを取りてその畑に播くときは、
萬の種よろよりも小さけれども、育ちては、樹となりて空の鳥きたり、
其の枝に宿るほどなり。(マタイ一三・三一・三二)

一粒の芥種、それは掌の中に置いて、さてどこにあるかというように小さい。しかしこの小さい一粒の芥種は生命で充滿している。畑に播いたら、もうわからない。しかし、それが殻を破って根を張り、芽を吹き出し、どんどん大きくなって樹となり、しまいに空の鳥が巢を枝の間に作って宿るといふ。天国はそうように大きくなるのだと。我々一人一人が芥種だとしても、魂の奥に聖霊という天来の種が宿らないと、この譬話のようににはならない。聖霊は原始力を有っている。これがないと深く、広く、高く展開してゆくことはできない。いろいろな運命環境の変転を、波状に寄せては返す艱難を、突破する力は聖霊にある。苦しんでいる人、悲しんでいる人、病んでいる人、迷っている人、求めている人、そういう人々を福音の中に導入する力は聖霊の愛と力と智慧にある。私も聖霊を宿す芥種一粒となつてから、即ち一九五〇年の晩秋天から聖霊が私に降つて以来、北は北海道から南は九州まで十二の召団が知らぬ間に形成された。いづれの召団も破れ幕屋であるがキリストの愛が抱いて下さる。ただ聖名を讃え奉る。

また我々一人一人が芥種一粒の如き原子核的な信に魂が凝集すれば不可能を知らぬ力にあづかる(マタイ一七・二〇)。それを靈子核とでも言はんかな。

9月27日

湖上のキリスト

(マタイ14:22-33)

(マルコ6:45-52)

(ヨハネ6:15-21)

二七
元氣を出せ、わたしだ、怖^こはがるな！ (マタイ一四・二七)

キリストが五個のパンと二匹の魚を受けとって天を仰いで祝し、五千人と女子供たちに頒ち与えたという大奇蹟を行ったことが、どの福音書にも記されてあるが、キリストという天的生命体は無尽の生命を宿している徴であった。(マタイ一四、マルコ六、ルカ九、ヨハネ六を見よ)。

そのあとで、キリストは山に登って独りで深い祈りをなされた。それは徹夜の祈りであった。弟子たちは舟で帰ることになっていた。ところが夜風が吹きあれて来た。弟子ども^{へんぎ}のことを願^{ねが}って、夜明けの四時頃、イエスは湖上を歩いて舟に近づいた。弟子どもは変化(幽霊)の者^{へんぎ}と思^{おも}って怖れ叫んだ。弟子ども^{へんぎ}の惶^{おそ}て騒ぐのを見て、キリストは「元氣を出せ、わたしだ、怖^こはがるな」と語りかけた。ペテロは「主よ、もしあなたなら、私に命じて、水を踏んで、み許に往かして下さい」と叫んだ。イエスは「来い！」とさし招いた。ペテロは言下に舟から出て水の上を歩み始めた。ところが、風を見て怖れた。とその瞬間に沈みかかった。「主さま、助けて下さい。」イエスは腕を伸ばしてペテロを捉えた。「噫、信仰うすき者よ、汝何で疑うか」と言^いって、ペテロと共に舟に乗った。イエスのこの言、「信仰うすき者よ」に讀^よいてはならない。信仰をそれでは厚くしようなど考える必要はない。自分の信仰などあてにせぬがよい。あてにするのはキリストだけ。「私だ」というみ声を靈聴せよ。こちらは空っぽで好い。絶信だ。キリストの全的な信が入っている。絶信の信、無信即無量信を賜る。そのとき俄然また果然み力がはたらく。

9月28日

カナンの女

(マタイ15:21-28)

(マルコ7:24-30)

一五・二三

視よ、カナンの女、このほとりから出て来て、叫んで「主よ、ダビデの子よ、お憐み下さい。娘が悪鬼に憑かれてひどく苦しんでいます」。「子供のパンをとって小犬に投げてやるのは好いことでない」。「そうです、主よ、小犬はそれでも主人の食卓から落ちるパン屑を喰べるのです」。「女よ、お前の信仰はえらい、お前の願いのように成れ！」娘はこの時刻から癒った。(マタイ一五・二三・二八)

ガリラヤ湖畔の伝道をひとまづ終えて異邦を巡回しようと西の方ツロとシドンの地方へイエスは足を向けた。土着のカナンの女が途上に現われて右掲の如き歎願をした。イエスは始め答えもしなかったが、あまり叫ぶので問答となった。イエスは選民イスラエルの「失せた羊」、即ち牧者たる神から離反している人たちを救うのが自分の使命だといって断った。「小犬」のような異邦人を救う使命はないのだ、と。どうもイエスらしくない答えである。カナンの女は喰いさがって「パン屑」で好いのですと迫った。イエスはこれには一本参った。それで直ちに娘は癒やされた。

あざやかにイエスを参らせたのはこのカナンの女が始めて終りかも知れない。ともあれ、イエスは全身でいつわりなくぶちまける態勢を無条件的に受け入れ給う。その人の過去がどうだこうだは問題でない。取税人であろうと遊女であろうと盗賊であろうと殺人犯人であろうと。イエスはその場その時に全存在でみ前に自分を投げだす魂をハタと体受し給う。その瞬間にその人自身が救われる。このカナンの女自身も救われたわけだ。

9月28日

(詩) カナンの女

作詞1981・1・7.

(マタイ15:21-28) 歌調S.217「あまつましみづ」

カナンの女

1

カナンの女 道べより
主のみ姿に 叫び寄る
「主よ、ダビデの子 憐み給へ
悪鬼に悩む わが娘！」

2

されどイエスは 応答せず
弟子どもも主に 請ひて言ふ
「帰し給へよ 叫ぶ女を！」
主は之を受け 可しとせり

3

「我は父より 遣はされ
ヤコブの家の 失せにける
羊の如きわが民のみを
救はんとてぞ 来りける」

4

カナンの女 跪き
「助け給へよ 我を主よ！」
「子供のパンを 小犬に投げじ」
主は情れなくも 拒みけり

5

女応へて 「然り主よ、
小犬も喰ふ 食卓より
落つる主人の 食屑をすら」
噫、この言葉 主を撃てり

6

「カナンの女！ 平安れよ
汝が信こそは 大いなり
願ひの如く 汝れに成れかし」
願ひの如く 癒やされぬ

9月29日

エクレシヤの磐^{ペトラ}ペテロ

(マタイ16:3-20)

(マルコ8:27-30)

(ルカ9:18-21)

「^{一六・二五}汝らは我を誰と謂^いうか」^{一六}シモン・ペテロ答えて言う「あなたはキリスト、活ける神の子であり給う」(マタイ一六・二五、一六)

イエスはガリラヤの北方のピリポ・カイザリヤ地方に方向を転じた。弟子たちに、「人の子、我を人々は誰だと言っているか、と訊ねた。「ある人は洗礼のヨハネ、或人はエリヤ、或人はエレミヤ、等という」と弟子どもは答えた。次に「汝らは我を誰と謂うか」との問いに対してペテロは右掲の如く答えた。この答に対してキリストは、汝の答は天の父からの啓示だ、お前はペトラ(磐)である、私はこの磐の上にわが教会を建てる、云々と宣言した、とある。しかし終末的な神の国、神の民を語っていたイエスが、いきなり「教会」というのはづはない。これは教会の根拠づけのためのつけ加えというのが一般の学説。

誰にせよ、イエスを「活ける神の子、キリスト」即ち救世主と告白するその人は磐になる。伝道、それも一対一の伝道で宜しい。伝道によって、二、三人キリストの聖名に在って集るところに即ちエクレシヤ(召されたる者の群)、教会が成るのである(マタイ一八・二〇)。教会は文字に即して訳すと「召団」といふべきで、私は私の群を「召団」といっている。これは私の恩師藤井武先生が「教会論」でそう書いたので私はそれを実践しているわけである。

ともあれ漁夫ペテロは歴史的に見て、弟子どもの首^{かしら}であったし、使徒ペテロとしてカトリック教会の創始者とされている。ペテロは併しこの告白のあとで、キリストに預いて「サタンよわが後に退け」と一喝された(一六・二三)。ペテロもペンテコステで聖霊が臨むまでは浮きつ沈みつの漁夫であった。

9月30日

いのち
生魂の重さ

(マタイ16:21-28)

(マルコ8:34-9:1)

(ルカ9:23-27)

一六・二四
人もし我に従い来らんと欲はば、己れ自身を棄て、おのが十字架を負ひて我に従へ。

己が生魂を救はんと欲う者は是れを失ひ、わがために己が生魂を失ふ者は是れを見出さん。

人、もし全世界を得るとも、己が生魂を失はば、何の益あらん。
またその生魂の代に何を与へん。(マタイ一六、二四、二五、二六)

これはイエス自身の大告白である。彼は本当に己れを十字架上に棄て給うた。神のため己が生魂を棄て血を流し給うた。彼は復活して永遠の靈生を身証なさった。今も靈界で生きて我々にはたらきかけ給う。彼は己を十字架上に棄てて、世の罪を贖い、全世界を得ておられる。靈界に君臨し給うキリストに誰が反抗できるか。反抗する者は自ら滅びる。

このキリストの十字架道を聖言に従って歩く者はキリストから見えざる十字架を額上にまた心臓の中に賜わる。この世のいかなる勲章もこれに如くものはない。その人は聖靈の力で十字架道を歩むことができる。世界史の中にそういう殉道の勝利者が人の知ると知らざるに拘らず星の如くいた。それは天界の神の書に記されてある。星の光よりもすばらしい光を放っている存在である。勿論キリスト者に限らない。神のみが知り給う。

人一人の生魂(プシュケー)は全世界にも代えられない。天秤の左の皿に地球を載せ、右の皿に一人の人を載せて重さを量るに、地球の方が軽くあがって、一人の人の方が重くなる。キリストの天的論理、物理はそういう霊理である。